

都道府県別賞一等

家族の幸せを守るため

大阪府 明星中学校 二学年

中尾 祐貴

八月に入り、とても暑くなってきた朝、僕はいつもとかわらず朝刊を手に取り読んでいた。「……、あれ？」と思ったのは、その朝刊の地域欄に、僕の祖父が重さ十一キログラムもある大きなスイカを持っている写真が載っていたからだ。とても笑っていて元気そうだったが、実は、家庭菜園を行なっている中、今年の一月上旬から二カ月間ガンの治療で入院し、まだ今年の三月に退院したばかりだったのだ。その頃の祖父はやせて、ポットのフタを開ける事すらできない状態で、今、目の前の新聞に掲載されている力強い笑顔を見る事ができるとは、想像すらできなかった。しかし、有難い事に祖父は医者のおすすめの治療を全て受ける事ができ、現在も定期的に検査を受けている。入院中に祖父が僕に言っていた事がある。

「じいちゃん、保険やめようと思ってたんや。元気やったからな。保険を掛けてたけど、使う事なかったしな。でもやめんで良かったわ。このおかげで、入院して治療しても、お金の心配せんでいいからな。」

僕はその時は笑って話を聞いていたが、確かに祖父は週二―三回卓球を楽しみ、畑をして元気に過ごしていたのだ。保険はもう必要ないかと思うのも無理はない。しかし現実が違う。何かあってから保険に入ってなくて困ったと気付くのではもう遅いのだ。僕達家族は、二年前に母が病気入院した際に、保険のお世話になったと、母から聞いて知っていた。その時は僕も祖父と同じように、「元気やねんし、保険とか入らんでも良かったん違うん。よう加入してたな。」と母に言っていた。その時に母は、

「元気な時はそれで良いねん。その方が良いねんから。同じ保険に入っていて、不幸にも病気やケガをした人の役に立つように、保険料を毎月払うねん。だけど、自分が病気になったら、他の人が毎月払ってくれている保険料から、今度は保険金という形で、お金をもらうねん。みんなで助け合っていて事かな。」と教えてくれたのだ。祖父も若い頃から何十年と保険を掛け続け、きつとさまざまな人の助けに微力ながらも協力する事ができたのではないだろうか。

今回は病気になってしまったが、その結果、他の加入者の方々に助けてもらえたのだ。普段なかなか、寄付をしたりする事はできないが、自らのために加入した保険の保険料を毎月少額でも掛け続ける事はできる。それが、気づかないうちに誰かの役に立つ事にもなる。今、僕達家族は元気に笑って過ごして

第54回中学生作文コンクール

いる。何より朝刊に掲載された元気に笑っている祖父の顔は絶対に忘れる事はないだろう。